『111の木』を読んで

四年　男子

少し前にＳＤＧｓについて、テレビでやっていました。その時は何も思いませんでしたしかし、本屋さんに行くと、この本のおびが目に入りました。ＳＤＧｓを考える本当の話と書いてあったからです。本当の話ってなんだろうと思い、読んでみることにしました。

本を開くと、本当の話で、一人の男の子から始まったと書いてありました。

スンダルは、毎日お母さんと、遠くの井戸まで水をくみに行きます。その水はきれいではありません。ぼくが住む日本は、じゃ口をひねれば、いつでも水が出ます。それも、きれいな水です。家もどろを固めた小さな家ではありません。おなかが空けば、ご飯やおかしを食べることができます。でも、スンダルの家族は、毎日おなかを空かせ、きれいな水もない生活をしていました。

ある日、お母さんがどくへびにかまれて死んでしまいました。この本を読んでいて、本当に悲しい気持ちになり、読むのがいやにな

20 × 20

りました。ご飯も水もほとんどなく、お母さんまで死んでいなくなってしまうなんて、今のぼくには考えられないからです。

スンダルは大きくなって、自分の子ども達に自分たちは自然にささえられていることを教えました。考えてみると、木がないと美味しい空気がなくなります。家も建てられません。水も野菜も育てることができません。

スンダルは、上のむすめを病気でなくしました。ずっと泣いていたそうです。そして、自分の悲しみを土にうめようと、わか木を植えました。その木にむすめの思い出が、何百年も生き続けることを信じて植えたそうです。

自分のするべきことがわかったスンダルは、選挙に出て、村長になりました。そして、女の子が生まれたら、百十一本の木を植えてお祝いしようと考えました。女の子も学校に行き、十八さいまで結こんさせないなど、村人に話しました。スンダルは、わかってもらえるまで、一生けん命に何度も、村人に話をし

ました。村人のために水道をひいたり、ほりを作ったり、子ども達がおなかを空かせないようにしたり、学校に行かせ学ばせたり、みんなが幸せになるように考え、がんばり続けたこと、本当にすごい人だと思いました。

SDGsには、十七この目標があります。ぼくにも、できることはあるのか考えました。世界では、きがでご飯が食べられなかったり、病気になっても治りょうが受けられず死んでしまったりする子がいると聞きました。ウクライナでは、戦争で物がないといわれたりしています。そんな人のために、自分のおこづかいから少しずつぼ金をしようと思いました。少しでもひんこんやきがをなくしたいです。また、学校生活でも、男女で差別をせず、その人の考えを大事にし、みんなが楽しく生活できる場を作りたいと思います。

最後に、ウクライナの戦争が早く終わり、世界中の人が笑ってくらせると良いなと思いました。

20 × 20